

謝靈運「山居賦」の自注について

橘 英 範

一 はじめに

よく知られるように、『宋書』謝靈運傳には、謝靈運（三八五～四三三）の代表作「山居賦」の正文とともに、それを凌ぐ文字数の膨大な自注が収められている。^①近年、中国文学の自注に関する多くの論考が発表されており、その先駆的なものの一つである「山居賦」の自注についても、後に掲げるようにすでにいくつかの卓論が存在する。このたび本稿でその自注を扱うのは、屋下に屋を架する行為に過ぎないかもしれないが、筆者なりに「山居賦」の自注について考えてみたいと思う。

考察に入る前に、まず「山居賦」の自注に関する先行文献について触れておきたい。

この自注の特異性に最初に注目したのは、管見の及んだ限りでは恐らく錢鍾書氏『管錐編』であろう。^②錢氏はまず「山居賦」の自注の煩雑さに触れ、注を施す必要がないと思われるのに施した例を列挙し、さらに、連続して用いられた典故のある語の一方に注を付けて一方には付けないという統一性を欠いた例を挙げる。続いて自注

の歴史に触れた上で、「山居賦」の自注がその創始であるとする（後述）。そして、本来は正文の中で全てを表現すべきであり、自注は作者にしか分からないようなやむを得ない場合のみ施されるべきであるとし、「山居賦」の自注には「義訓」「本事」「申意」の三者があつて、広く注が付けられているが要領を得ておらず、ますます乱雑になつてしまつてゐる（又泛施寡要、愈形凌雜）と評している。その後、賦の正文と自注の中から様々なテーマを取り上げて考証を行つてゐる。

次に、森野繁夫博士は「謝靈運の賦（二）」において、「山居賦」の自注を（一）語句・内容の解説、（二）本文に読み込めなかつたことの補足、に分け、「説明が無ければ読者に意味がよくわからない語句が多く使われており、また、具体的な事柄は、文章の調子を崩してしまふおそれがあつた」ために自注が施されたとしておられる。

続いて齋藤希史氏は「謝靈運の山居——入居の文学（二）」において、「山居賦」の自注は賦の本文によつて示された空間を現実化するものであるとし、謝靈運の山水詩や『遊名山志』との関連についても言及している。そして、

自注の表現の基軸が視点の移動にあるのに対し、賦の本文の表現の基軸は整った対偶にあり、その両者が統合されるのが山水詩であると位置づける。

次いで許恬怡氏は「謝靈運『山居賦』自注原因析論」の専論において、^⑤ 賦注と自注の起源に触れ、「山居賦」自注をその嚆矢とする錢鍾書氏らの説を追認する（後述）。そして「山居賦」自注を『世說新語』注・『水經注』と比較した後、自注を作った理由として、（一）才学を自負し、不朽のものとすることを求める、（二）読者の誤読を避ける、（三）自注を借りて仏学に対する自らの研究結果を示す、（四）自注を借りて「東山再起」の思いを表明する、（五）「安身立命」の道を求める、の五つを挙げる。

そして東美緒氏は「謝靈運『山居賦』とその自注」の専論において、自注を（A）単語や句ごとの解釈、（B）その章全体、あるいは複数の句の要約、（C）音注の列挙、（D）文献の引用、及びそれによる傍証、（E）自身や祖父謝玄についての説明、（F）付近に住む、あるいは住んでいた人物の紹介、（G）自身の体験によると思われる記述、の七種に分けた上で、EFGの例を挙げ、絢爛な文章でありながら写実性が問題とされる前代の賦に対し、謝靈運は華麗さと高い写実性とを兼ね備えた賦を理想として、正文では彫琢を凝らして美しく描き、自注で写実的に描写したと指摘している。

本稿ではこれらの業績に導かれながら、「山居賦」の自注について筆者なりに考察してみたい。

二 自注と賦の注の流れ

まず、「山居賦」の自注が生まれた背景を知るために、自注の流れと賦の注の流れについて考えておきたい。

先述のように、錢鍾書氏『管錐編』はこの問題に対して先鞭を付けているが、錢氏はまず、清の何瑋の『樵香小記』卷下「總集自註賦註詩」に、「自註己ら作るも、亦た（王）逸に始まる。而して戴凱之の竹譜・謝靈運の山居の賦、其の例を用ふ（自註己作、亦始於逸。而戴凱之竹譜・謝靈運山居賦、用其例）」^⑥ といひ、その注に「漢書藝文志も亦た自註あり。然れども寥寥として、幾くも無く、又た文義を發明するに非ず。故に以て始めに托せず（漢書藝文志亦自註。然寥寥無幾、又非發明文義。故不以托始）」^⑦ といふのを引く。

すなわち、靈運に先立つ自注の例として、まず王逸が『楚辭』に自らの「九思」を加えて注を付けた例と晉の戴凱之の『竹譜』の例を挙げ、『漢書』藝文志の例の場合は量が少なく文の意味を説明したものではないとして除外するのである。

これに続いて錢氏は、清の梁玉繩の『管記』卷四に「謝靈運傳に、山居の賦并びに自注を載す。之を載するは、乃ち史例の創見なる者なり。魏書張淵傳に觀象の賦を載せ、北齊書顏之推傳に觀我生の賦を載せ、自注有ること全じ。竹汀詹事（錢大昕）云ふ、陳壽 楊戲の季漢輔臣贊を載せて注有り、又た宋書の前に在り、と（謝靈運傳、

載山居賦并自注。載之、乃史例之創見者。魏書張淵傳載觀象賦、北齊書顏之推傳載觀我生賦、有自注全。竹汀詹事云、陳壽載楊戲季漢輔臣贊有注、又在宋書之前」というのを引く。

歴史書に賦の自注が引かれた例として、北魏の張淵の「觀象賦」(『魏書』本傳⁽¹⁰⁾)と北齊の顏之推の「觀我生賦」(『北齊書』本傳)があり、さらに錢大昕によれば、謝靈運に先立つものとしては三国の楊戲の「季漢輔臣贊」(『三国志』蜀書本傳。後述するように、實際は自注ではない)、があるというのである。

以上の説を挙げた上で、錢鍾書氏はさらに、次の三つの根拠を挙げてその説を検討する。

まず、『楚辭』王逸「九思」序文の末尾の「辭曰」に対する洪興祖の補注に「逸應に自ら注解を爲るべからず、恐らくは其の子の延壽の徒之を爲るのみ(逸不應自爲注解、恐其子延壽之徒爲之爾)」という例である。これによれば「九思」の注は王逸の自注でないことになる。

次に、張衡の「思玄賦」(『文選』卷一五)題下の「舊注」二字に対する李善の注に、「未だ注者の姓名を詳らかにせず。摯虞の流別に題して衡の注と云ふ。其の義訓を詳らかにするに、甚だ疎略多くして、注又た愚と稱して以て疑辭を爲す、衡に非ざること明かなり(未詳注者姓名。摯虞流別題云衡注。詳其義訓、甚多疎略、而注又稱愚以爲疑辭、非衡明矣)」という記述を引く。この旧注を張衡の自注とする摯虞の「文章流別志論」を否定した

ものである。

第三に、『世說新語』文学篇の注に引く「左思別傳」に「凡そ諸注解は、皆な思自ら爲る。其の名を重くせんと欲して、故に時人の名姓を假るなり(凡諸注解、皆思自爲。欲重其名、故假時人名姓也)」という記述と、嚴可均がそれに対して反駁したことを挙げている(『全晉文』卷一四六。長文のため錢氏も省略しているので、ここでも省略した)。左思の「三都賦」の注が實際は自注であるとする説に対する反駁である。

錢氏は以上三つの根拠を挙げた上で、王逸・張衡・左思の注が自注ではないとすると、自注は謝靈運の創始によるものであらうと結論づける。上に挙げられていた中で、三国の楊戲の「季漢輔臣贊」と晉の戴凱之の「竹譜」の例については全く触れられていない。「季漢輔臣贊」については、後に見るように、實際は自注ではなく陳壽の注であつて、梁玉繩または錢大昕の誤りと考えられる。

錢鍾書氏が『警記』のこの部分までを引用しているということは、錢鍾書氏は自注の例と考えていたのではないかと推測されるが、それにもかかわらず靈運の創始とするのは、戴凱之の『竹譜』とともに賦ではないということ、考察から除外したのであらうか。

これに対し、後述の許恬怡氏が参照する程章燦氏『魏晉南北朝賦史』は、第五章第二節の五「賦注…形態与意義」において、自注の先駆的なものとして左思の「齊都賦」注や庾闡の「揚都賦」注、曹毗の「魏都賦」注、郭

璞「蜜蜂賦」注といったものがあり、謝靈運はそれを大きく発展させた指摘する。

以上の謝靈運を先駆とする説と先例があるとすると説を承けて、許恬怡氏は「齊都賦」注・「魏都賦」注・「蜜蜂賦」注は『全晉文』に自注が残っていないため考察の対象にできず、『全晉文』に載る「揚都賦」注は「判、本作泮」というわずか一句が残るのみであり、また自注であるかどうか疑わしいものであるということから、「山居賦」自注をその嚆矢としている。

念のため記せば、『全晉文』に見えないだけで、左思「齊都賦」注は『水經注』や『文選』李善注等に引かれて残っており、音注としてではあるが、『隋書經籍志』にも「齊都賦二卷并音、左思撰」と見えている。庾闡「揚都賦」注も『水經注』や『藝文類聚』等に引かれ、曹毗の「魏都賦」注も李善注と『太平御覽』に引かれている。ただ、隋書に作者として明記される左思以外については、賦の作者名のみを記して注者の方はその名を記さなかったという可能性も皆無ではなく、また、いずれも非常に断片的であり、どの正文と対応するのか明らかでないものがほとんどであるので、確かに考察の対象とはなりにくいかもしれない。ただ、先行する賦の自注もあつた可能性があることは注目されよう。

また、許氏も錢氏と同じく賦の注に限定しているようだが、自注が生まれた背景ということを考える上では、やはり賦以外のものにも目を向ける必要があるのではない

いか。その点から見ると、何瑋の挙げた『竹譜』の注は、押韻する四字句を中心とした文章に、散文の注釈が施されたもので、賦と題されてはいないが、形式的には「山居賦」とその自注と近いものといえ、その先駆的なものと考えられるのである。

賦に限らなければ、自注の施された作品は他にも見出せる。これに関しては、劉知幾『史通』補注篇が多くの例を挙げてくれている⁽¹³⁾。

劉知幾は注釈を四つに分類し、裴駰・李奇・應劭・晉灼らによる三史の注を「儒宗」として最高のものとし、それに劣るものとして「文言美辭、章句に列し、委曲敘事、細書に存する（文言美辭、列於章句、委曲敘事、存於細書）」もの、「衆史の異辭を掇ひ、前書の闕く所を補ふ（掇衆史之異辭、補前書之所闕）」もの、「躬は史臣爲るも、手自ら刊補す（躬爲史臣、手自刊補）」るもの三つを挙げる。

このうち第二の「衆史の異辭を掇ひ、前書の闕く所を補ふ」ものは、劉知幾が『三國志』裴松之注や『世說新語』劉孝標注を例として挙げているように、自注とは関わらないものである。第三の「躬は史臣爲るも、手自ら刊補す」るものは、歴史家でありながら自分自身で注までも補つたということで、すなわち自注を付けたものということになる。劉知幾は梁の蕭大圜の『淮海亂離志』⁽¹⁴⁾、北魏の羊（楊）銜之の『洛陽伽藍記』、北齊の宋孝王の『關東風俗傳』、隋の王劭の『齊志』といったものを挙げてい

る。散佚したのも多く、またいずれも謝靈運の後の例ではあるが、六朝後期に南北朝で多くの自注形式の歴史関係の書が生みだされていたことがうかがえる。

第一の「文言美辭、章句に列し、委曲敘事、細書に存する」ものにはやや問題がある。意味としては、本文では美しいことばで表現し、細かいことは注で記すものということになるが、劉知幾はその例として、摯虞の『三輔決錄』の注、陳壽の『季漢輔臣贊』の注、周處之の『陽羨風土記』、常璩の『華陽國志』を挙げている。『三輔決錄』は漢の趙岐の撰・晉の摯虞の注であり、『季漢輔臣贊』は先に挙げたように三国蜀の楊戲の撰であり、これを『三國志』に収める際に陳壽が注を施したことは、楊戲傳に明記されている。すなわちこの前二者は自注ではないことになる。一方、晉の周處之の『陽羨風土記』、晉の常璩の『華陽國志』は、ともに当時他者による注が付されたという記録はないようで、注があるとすれば自注の可能性が高いということになり、さらに謝靈運に先立つ例ということになる。ただ、『陽羨風土記』の方は散佚してしまい、実際の状況が明らかでない。『華陽國志』は、卷一〇「先賢士女總贊」の部分が、四字句で押韻を行う贊の部分と、それに施された散文による伝記の注に分かれており、劉知幾はこれを指しているとされる。これは賦ではないけれども、有韻の文についた散文の自注の例として、戴凱之の『竹譜』とともに、「山居賦」の先駆的作品と考えられよう。

以上をまとめると、賦に限らなければ、自注には戴凱之の『竹譜』と常璩の『華陽國志』の前例があり、後には『洛陽伽藍記』が生まれ、賦においても張淵の「觀象賦」・顔之推の「觀我生賦」といった例が生み出されている。「山居賦」の自注もそういった時代の風潮の中で生み出されたといえるだろう。

次に、賦の注の流れという点からも考えてみたい。

これについては前掲程章燦氏『魏晉南北朝賦史』に詳しい記述があるので、それに基づきつつ、例を付け加えながら記すこととしたい。まず賦の注の先駆としては、後漢の班固の「幽通賦」(『文選』卷一四)に付された妹の曹大家(班昭)の注があり、これは李善注に引かれて残っている。程氏はそれに続くやや特殊な例として『漢書』に引かれた賦に付された服虔・應劭らの注を挙げた上で、賦の注は魏晉から盛んになったとして、張衡「二京賦」に対する三国呉の薛綜の注、左思の「三都賦」に対する同時代の張載・劉逵・衛權の注、王僧虔の「書賦」に対する王儉の注、昭明太子の「徂歸賦」に対する劉杳の注などを挙げている。

その他にも、程氏も挙げる左思の「三都賦」(『文選』卷四・六)には、前掲の三者の他にも少なくとも序文にはさらに綦母邃(時代不詳)の注が付されたようで、実際に『文選集注』に引かれて残っており、『隋書』經籍志にも「綦母邃注三都賦」と見えている。

また、『文選』李善注に引かれて残っているものには、

他にも晉の郭璞による「子虚賦」「上林賦」(『文選』卷七・八)の注・潘岳の「射雉賦」(『文選』卷九)に対する謝靈運と同時代の徐爰の注などがあり、時代不明のものでは先に触れた班固の「幽通賦」(前出)に対する項岱の注もある。

散佚したものとしては、魏の傅巽の注した「二京賦」・晉の蕭廣濟の注した「木玄虚海賦」・時代が不明の晁矯の注した「二京賦」などが『隋書』經籍志に見えており、当時多くの賦の注が作られていたことがうかがえる。

また、後に触れるように「山居賦」自注には音注が見えるが、音注の書と思われる例も、程氏が挙げるように、『隋書』經籍志に、先に引いた左思の「齊都賦二卷并音」の他に、李軌(晉)と綦母邃の「二京賦音二卷」、同じく李軌撰の「二都賦音一卷」、謝靈運と同時代と思われる「百賦音十卷、宋御史褚詮之撰」などが見えている。

このように見てくると、謝靈運の「山居賦」の自注は、賦の注釈が盛んに行われた時代を背景に生み出されたと思われるのである。

以上、本節では、自注と賦の注の変遷の面から「山居賦」の位置づけを試みた。自注を施すという行為は、謝靈運以前にも行われていた可能性があり、賦に限らなければ、謝靈運以前にも戴凱之の「竹譜」と常璩の『華陽國志』といった前例が現存し、後には張淵の「觀象賦」・顔之推の「觀我生賦」といった例が作られていた。また、

賦の注全体を眺めてみると、漢魏以降数多くの注が生まれていることが確認できた。謝靈運の「山居賦」自注は、確かに賦の自注がほぼ完全な形で現存しているという点では先駆的なものではあるが、やはりこういった時代の流れがあつたからこそ生まれたものであるといえよう。

三 「山居賦」の自注

次に、実際に「山居賦」の自注について検討していこう。「山居賦」は自注が挿入されていることによつて機械的に全四七章に分けることができ、森野博士はそれを全一四章とした上でその中の章を細かく節として分けており、東氏はこの四七章をそのまま数字で称している。ここでは分かりやすくするため、両方の分け方を併記することとした。テキストには中華書局点校本『宋書』を用い、解釈に際しては森野博士『謝康樂文集』¹⁷⁾および李運富氏『謝靈運集』¹⁸⁾を参照した。

「山居賦」を自注とともに冒頭から読んでいて気付くのは、ある部分では音注が中心になり、ある部分では辞書的な説明が中心になり、ある部分では山居の状況を記すことが中心になっているという風に、非常に変幻自在の自注が施されていることである。そのことは、許氏が自注を付けた理由を五つ挙げ、東氏が自注を七種類に分類したこととも関係しているよう。

従来の研究においては、これらのうち、語義に関する辞書的な注や音注などには余り注意が払われて来なかつ

たが、ここでは全てを対象とすることとし、先行研究にあまり引かれていない部分を中心に見て行きたい。

まず、表現の意図を説明した部分を含む例を見よう。

第四章 山居の近くの東西南北の様子 第三節 近西（Ⅱ第九章）

近西則、楊賓接峯、唐皇連縱。室壁帶谿、曾孤臨江。

竹緣浦以被綠、石照澗而映紅。

月隱山而成陰、木鳴柯以起風。

近き西には則ち、楊・賓 峯を接し、唐皇 縱を連ぬ。室・壁 谿を帶び、曾・孤 江に臨む。竹は浦に緣りて以て綠を被ひ、石は澗を照らして紅を映す。月は山に隠れて陰を成し、木は柯を鳴らして以て風を起こす。

【自注】楊中・元賓、並小江之近處、與山相接也。

唐皇便從北出。室、石室、在小江口南岸。壁、小江北岸。並在楊中之下。壁高四十丈、色赤、故日照澗而映紅。曾山之西、孤山之南、王子所經始、並臨江、皆被以綠竹。山高月隱、便謂爲陰、鳥集柯鳴、便謂爲風也。

楊中・元賓は、並びに小江の近處にして、山と相

ひ接するなり。唐皇は便ち北より出づ。室は、石室、小江の口の南岸に在り。壁は、小江の北岸なり。並びに楊中の下に在り。壁は高さ四十丈、色は赤く、故に澗を照らして紅を映すと曰ふ。曾山の西、孤山の南は、王子の經始する所にして、並びに江に臨み、皆な被ふに綠竹を以てす。山高くして月隱る、便ち謂ひて陰と爲す。鳥集りて柯鳴る、便ち謂ひて風と爲すなり。

正文の前半の四字句部分では、山の状況が表現され、後半は風景描写が中心となっている。自注においては、「楊中」「元賓」「唐皇」といった固有名詞が詳しく説明されている。「壁は高さ四十丈」以下の部分は、『管錐編』が、自注がないと「映紅」は花のことと勘違いされる可能性があると指摘するように、自注によつて描写の意味が明かされた部分といえるだろう。『管錐編』はまた、重複した感のある「木鳴柯」の表現は、自注を見れば鳥のことであると分かるが、「鳥鳴柯以起風」としないのは、まるで虎でも吠えているようだと言はれるためであろうか、と揶揄しているが、見る角度を変えれば、自注がなければかなり解釈が難しい部分が、自注によって意味が分かりやすくなっているといえるだろう。

次に、辞書的な注や音注を含む例を見てみたい。

第五章 山居から遠くの東西南北の様子 第四節

波
恒つねならず、
爲ためにき合がふするなり。

山居の遠北の状況を詠じた部分で、自注では大まかな状況に対する注と『老子』の引用を行つた後、「漲」「島」「漲」といつた言葉が丁寧に説明されている。「漲」はやや特殊な意味の使い方なので説明も必要であらうが、「島」「嶼」については、他の語に説明がなく、これらにのみ説明がある理由が不明のようにも思われる。⁽¹⁹⁾

第八章 山居付近の動物について 第二節 鳥について (Ⅱ第五章)

鳥則、鵲鴻鴉鵲、鵲鷺鵲鵲。雞鸛繡質、鵲鸛綬章。
晨覺朝集、時鶴山梁。海鳥遑風、朔禽避涼。
黃生歸北、霜降客南。接響雲漢、侶宿江潭。
聆清哇以下聽、載王子而上參。

薄回涉以弁翰、映明壑而自耽。

鳥には則ち、鵠・鴻・鴝・鶻・鷺・鷩・鷮
あり。雞・鵲には繡の質あり、鸛・鶴には綬の章あり。晨鳧は朝に集まり、時鴈は山梁にあり。海鳥は風を達け、朔禽は涼を避く。萬生じて北に歸り、霜降りて南に客となる。響きを雲漢に接し、江潭に侶宿す。清眊を聆きて以て下り聽き、王子を載せて上り參く。薄か回涉して以て翰を辨しくし、

明壑に映して自ら耽る。

【自注】鵲音昆。鴻音洪。鵲音溢。左傳云、六鵲退飛、字如此。鵲音下竺反。鵲音秋。鷺音路。鵲音保。鵲音相。唐公之馬、與此鳥色同、故謂爲鵲、音相。鷺鵲鷺、見張茂先博物志。鷺音翟、亦雉之美者、此四鳥並美采質。鷺音符、野鴨也、常待晨而飛。鷺音己消反、長尾雉也。論語云、「山梁雌雉、時哉時哉。」海鳥爰居、臧文仲不知其鳥、以爲神也。事見左傳。朔禽、雁也、寒月轉往衡陽。禮記、霜始降、雁來賓。歲莫云、雁北向。政是陽初生時、黃生歸北、霜降客南。山雞映水、自翫其羽儀者。

鵲の音は昆。鴻の音は洪。鵲の音は溢。左傳に、六鵲退き飛ぶと云ひ、字は此くの如し。鵲の音は下竺の反。鵲の音は秋。鷺の音は路。鵲の音は保。鵲の音は相。唐公の馬、此の鳥と色同じ、故に謂ひて鵲と爲す。音は相。鷺・鵲・鵲・鵲は、張茂先の博物志に見ゆ。鵲の音は翟、亦た雉の美なる者。此の四鳥は並びに美しき采質あり。鷺の音は符、野鴨なり、常に晨を待ちて飛ぶ。鷺の音は己消の反、長尾の雉なり。論語に云ふ、山梁の雌雉、時なる哉時なる哉、と。海鳥は爰居、臧文仲。其の鳥を知らず、以て神と爲すなり。事は左傳に見ゆ。朔禽は、雁なり、寒月に轉じて衡陽に往く。禮記に、霜始め

て降り、雁來り賓す、と。歲莫れて云に、雁は北に向かふ。政に是れ陽の初め生ずる時。黃は生じて北に歸り、霜は降りて南に客となる。山雞は水に映して、自ら其の羽儀を翫む者なり。

正文の前半では主に鳥の名が列挙されており、後半では鳥の描写が行われている。正文よりはるかに長い自注は、前半は音注がほとんどであり、後半は資料を引きつつ説明が加えられている。前半部分を見ると、声訓あるいは破音字の音を定めるなどの、音注と意味の注を兼ねるというのではなく、純粹に音のみを示す場合がほとんどなのである。後半には、「此の四鳥は並びに美しき采質あり」というのが正文の「繡の質あり」「綬の章あり」という表現の説明であるように、正文を理解する上での必要性がうかがえるものもあるが、臧文仲が海鳥の鳥を知らずに神かと思つたという『左傳』の故事が引かれてゐるのなどは、正文理解の上ではほとんど関係がないようにも見える。

齋藤氏と東氏がともに引く、「第十一章 南北兩居の自然について 第一節 南山の住居と周圍の自然」（Ⅱ第三章）の部分の自注にも、正文とは「むしろ全く別個の文章として成り立っているようにさえ見える」（東氏）注があり、それが両氏が指摘される賦の文章の美と現実との関係という点に結びついていくのだが、この『左傳』の故事の場合などは、賦の正文とも現実とも関係性を持

たないようにも思われるのである。

そしてその一方で、例えば「王子を載せて上り参く」の句を理解するためには、王子喬が鶴に乗って昇仙したという故事を知っている必要があるが、これについては自注では全く触れられない。『管錘編』にも指摘されていた、統一性のない例の一つとも見なせよう。

統一性のなさという点からいえば、音注が施されていること自体に関しても同様のことが指摘できる。このような音注は、第八章「山居付近の動物について」（第二四・二六章）の部分に集中的に用いられ、その後は第十章「山居における山作・水役・採拾の諸事について」（第二三章）の部分にのみ用いられて、他には見られないものである。例えば「第七章 山居附記の植物の様子」には「第一節 水草について」「第二節 菓草について」（第一九・二〇章）といった馴染みのない植物名が列挙される部分があるが、そこには音注は施されていないのである。

このような統一性のなさを感じさせる例をもう一つ挙げてみよう。

第十一章 南北両居の自然について 第四節 山居での暮らし（第三八章）

春秋有待、朝夕須資。既耕以飯、亦桑貿衣。
藝菜當肴、採藥救頽。自外何事、順性靡違。

法音晨聽、放生夕歸。研書實理、敷文奏懷。
凡厥意謂、揚較以揮、且列于言、誠特此推。

春秋 待む有り、朝夕 須て資とす。既に耕やして以て飯ひ、亦た桑とりて衣に貿ふ。菜を藝ゑて肴に當て、藥を採りて頽へを救ふ。自外に何事あらん、性に順ひて違ふ靡し。法音 晨に聽き、放生して夕べに歸る。書を研めて理を賞し、文を敷きて懷ひを奏ふ。凡そ厥の意に謂ふを、揚較して以て揮ひ、且つ言に列ね、誠めとして特に此に推す。

【自注】謂寒待綿纈、暑待絺綌、朝夕飡飲、設此諸業以待之。藥以療疾、又在其外。事之相推、自不得不然。至於聽講放生、研書敷文、皆其所好。韓非有揚較、班固亦云揚較古今、其義一也。左思曰、爲左右揚較而陳之。

寒には綿纈を待み、暑には絺綌を待み、朝夕の飡飲、此の諸業を設けて以て之を待むを謂ふ。藥の以て疾ひを療すは、又た其の外に在り。事の相ひ推すは、自然らざるを得ず。講を聽き生きたるを放ち、書を研め文を敷くに至つては、皆な其の好む所なり。韓非に揚較有り、班固も亦た古今を揚較すと云ふ、其の義一なり。左思曰く、左右の爲に揚較して之を陳ふ、と。

正文は山居における暮らしぶりを詠じており、前半では農耕生活について述べた後、後半では精神的な活動について描写している。それに付けられた自注であるが、前半は正文全体の大まかなまとめとなっているのに対し、後半は「揚較」の語に施された注であって、一語に対してわざわざ『韓非子』・班固(『漢書』敘傳)・左思(『蜀都賦』)の三つの資料を引くという徹底ぶりである。この辺りにも統一性のなさを感じられるのではないだろうか。この統一性のなさという問題は、実は先に述べた「山居賦」自注の多様さとも関わってくる。例えばもし謝靈運の注が音注ばかりであつたら、統一感があつたであろうが、実際はそうなつておらず、多彩な姿を見せているのである。

以上、紙幅の関係であり多くを挙げることはできなかったが、先行研究にはあまり触れられていない例を中心に挙げ、従来注目されてきた、作者謝靈運でなければ書けないような注の他に、音注や辞書的な注、統一性のなさを感じられる注についても粗上に載せてみた。

ではなぜこのような注が施されているのであろうか。単に謝靈運が千年以上も前の人で、現代の我々から見た統一性というものと無縁だったからであらうか。

恐らくそうではあるまい。第二節で賦の自注の例として挙げた張淵の「觀象賦」に施された自注は、天体を詠

ずる正文に対応した、天体の名称や運行に関する注がほとんどであり、辞書的な注も散見するが、本文に即して解説する注とまとめることができる。顔之推の「觀我生賦」の自注も歴史的事実に関する注がほとんどであって、『管錐編』は謝靈運と比較してその注の謹厳さを称えている。

自注ではないが、逆に、辞書的な注・音注・出典の引用・表現意図の解説などの各種の注を全体にわたって施しているという意味で統一性があるものとして、前節で触れた「二京賦」の薛綜注や「三都賦」の劉逵注が挙げられる。『文選』から李善の注を除いてみると、これらの注が正文全体に対して様々な注を施しており、全体として統一がとれていることが確認できるのである。

このことから考えると、恐らく謝靈運も統一感のある注を作ろうと思えば作れたと思われる。その謝靈運がこのような多彩な自注を施したということは、これらすべてを靈運が必要と感じたから書かれたのではないだろうか。

例えば音注についていえば、先に引いた部分が音注のみに終始せず、後半部分には内容に関する注も施されていたということは、謝靈運が音注の必要性を感じていたことを側面から説明しているよう。もし読者に意味を説明するのが主眼であつて音注の必要性がないのであれば、音注を施さず、内容に関する注のみにすればよかったはずである。そのような部分は他にも多いのだ。

先に述べたようにこれらが純粹に音のみを示す注であるということは、読者に正しい音で読んで韻律の美しさを感じてほしいというのが最大の目的であったと思われる。それが一部にしかついていないのは、やはり鳥獸の名前が列挙されるような部分は見慣れない文字の羅列になるが、退屈な羅列に見えるその部分こそ音の工夫をしていることを示そうとしているのではないだろうか。

辞書的な注が施されたり、有名な出典が引用されているのも、読者にこの点だけは押さえた上で読んでほしいという謝靈運の思いの現れなのではないか。一見正文とは無関係に見える記述も、謝靈運にとつては、正文に直接は関わらなくても、その背景を知った上で読んでほしいということなのではないかと思われるのである。

四 おわりに

以上本稿では、「山居賦」の自注について筆者なりに考察してみた。最後に、「山居賦」が以上のような様々な要素を持つ注になったもう一つの理由を、なぜ謝靈運は他の賦には自注を施さなかったかということと関連づけて考えてみたい。

謝靈運には同じく『宋書』に引かれる「撰西賦」を初めとする賦の作品が他にもあるが、なぜ「山居賦」のみ自注が施されたのであろうか。その最大の理由はやはり山水詩人謝靈運にとつての始寧の山居が持つ重要性ということになるだろう。謝靈運にとつて始寧の自然という

ものは非常に大きな存在だったため、賦に詠ずるに当たって、単に正文で華麗に表現するのみでは飽きたらず、表現の彫琢を要しない注の形式で詳しく説明せずにはいられなかったのではないだろうか。そして、その注で表現しようとしたことが、自注の多様性に関わってくるのではないかと思われるのである。

第二節に挙げた従来の賦の注と正文の文字数を比較すると、次のようになって²²⁾いる。

作品名	正文字数	注釈字数	対正文比
西京賦・薛綜注	三九〇八	五四四八	一・三九
東京賦・薛綜注	三七六九	一一〇三四	二・九三
思玄賦・旧式注	二七六九	三五七五	一・二九
三都賦序・劉逵注	三三一	一〇七	〇・三二
蜀都賦・劉逵注	一九九六	四八六五	二・四四
吳都賦・劉逵注	三七九五	一一〇三四	二・九一
魏都賦・劉逵注	三九五九	九〇六一	二・二九
射雉賦・徐爰注	七七二	二一六八	二・八一
山居賦・自注	三九一五	四九三二	一・二六
觀象賦・自注	一二六三	三七六三	二・九八
觀我生賦・自注	二〇六〇	一六八七	〇・八二

この表を見ると、現存する資料による限り、従来の注は正文の約三倍の量までに止まっており、賦の注の量はおおよそこのくらいまでという認識が存在していた可能

性がうかがえる。

もしそうであつたとすれば、謝靈運も同様に考えており、實際はもつと膨大な注を付けたかつたのだが、その中から必要不可欠なものだけが残された結果が現在の「山居賦」自注なのではないだろうか。

先に見たように、この自注は、一見すると統一性がないように感じられるが、もし謝靈運が基づいた出典の全てを引用し、罕見の文字に全て音注を付け、難解な表現の意図を全て説明することによって、統一的な注を付けるとしたら、恐らく自注は現在の数倍の量になるであろう。そうなると、現在でさえ正文の一・二六倍の量がある自注は、正文の三倍を遥かに超える長大な注になってしまう。そのため、謝靈運はそれを避けようとしたのではないだろうか。

これに関連して、次のような興味深い例もある。

第七章 山居付近の植物の様子 第一節 水草について（Ⅱ第一章）

水草則、萍藻蘊蒨、藿蒲芹蓀、兼菰蘋蘩、絕荇菱蓮。

雖備物之偕美、獨扶渠之華鮮。

播綠葉之鬱茂、含紅敷之繽翻。

怨清香之難留、矜盛容之易闌。

必充給而後寧、豈蕙草之空殘。

卷敏弦之逸曲、感江南之哀歎。

秦箏倡而溯游往、唐上奏而舊愛還。

水草には則ち、萍藻・蘊蒨、藿蒲・芹蓀、兼菰・蘋蘩、荇・菱蓮あり。備はりし物の偕な美なりと雖も、獨り扶渠の華のみ鮮やかなり。綠葉の鬱茂たるを播げ、紅敷の繽翻たるを含む。清香の留め難きを怨み、盛容の闌へ易きを矜しむ。必ず給に充てて後に寧り、豈に蕙草のごとく空しく殘はんや。敏弦の逸曲に卷き、江南の哀歎に感ず。秦箏の倡はれて溯游して往き、唐上の奏されて舊愛は還る。

【自注】秦出離騷。敏弦は是れ采菱歌。江南是相和曲、云江南采蓮。秦箏倡兼茄篇、唐上奏蒲生詩、皆感物致賦。魚藻蘋蘩荇亦有詩人之詠、不復具敘。

秦は離騷に出づ。敏弦は是れ采菱歌。江南は是れ相和曲、江南・蓮を采ると云ふ。秦箏もて兼茄篇を倡ひ、唐上もて蒲生の詩を奏す。皆な物に感じて賦するを致す。魚藻・蘋・蘩・荇も亦た詩人の詠有るも、復た具さには敘べず。

正文では、水草を列挙した後、それにまつわる音楽の故事を詠じているが、その自注に「魚藻・蘋・蘩・荇も亦た詩人の詠有るも、復た具さには敘べず」といい、できればもつと書きたかつたような口ぶりである。齋藤氏

が「表現を尽くすことが求められる賦という文体において、その不十分さへのおそれが賦の中で吐露されること自体は、謝靈運に限ったことではない」と指摘されるように、「山居賦」においても、正文でも自注でもしばしば正文の「不十分さへのおそれ」は言及されているが、ここでは自注そのものに関して、さらに表現したかった思いが匂わされるような記述がなされているのである。

恐らく謝靈運は、許されることならもつと大量の自注を書きたかったのだが、彼にとつての山居が非常に重要な存在であったがゆえに、当時の常識からすると桁外れな量の注になりそうだったのであろう。現在見られる自注は、靈運が施したかった膨大な注の中から、彼独自の基準で抽出されたものではないか。そして正文の内容によって必要なものが異なっているために、ある部分では音注が中心になり、ある部分では辞書的な説明が中心になり、ある部分では表現の意図の説明が中心になり、という具合に変化しているのではないだろうか。それは、我々の目からはいかに煩雑に見えようとも、謝靈運にとつては必要最小限のものであったのではないかと思われるのである。

以上、謝靈運「山居賦」の自注について、筆者なりに考察を加えてみた。山水詩等謝靈運の他の作品や伝記との関連など、多くの問題が残されており、また門外漢ゆえの多くの誤りもあることと思われる。諸賢のご教示・ご批正をいただければ幸甚である。

注

(1) 注6後掲許恬怡氏によれば、正文が三九一五字、自注が四九三二字であるという。

(2) 「山居賦」以外の中国文学の自注に関する主な論考には下記のものがある(自注に引かれた詩句を研究対象とするものは除いた)。

・戸崎哲彦『柳宗元集』に見られる“自注”に関する諸本間の異同について『滋賀大学経済学部研究年報』第一卷、一九九四年)

・赤井益久「自注の文学——『元氏長慶集』を中心として——」(『中国古典研究』第四七号、二〇〇二年)

・山上恵「蘇軾詩における自注」(『待兼山論叢』第四六号文学篇、二〇一二年)

(3) 第一六八条『全宋文』卷三二(中華書局、一九七九年)。

(4) 『中国中世文学研究』第三五号、一九九九年、のち『謝康樂文集』(白帝社、二〇〇三年)に収める。

(5) 『中国文学報』第六一冊、二〇〇〇年。

(6) 『淡江中文學報』第一六期、二〇〇七年。なお、以下に掲げる五つの理由に(四)がなく、(四)を(五)、(五)を(六)としているが、誤りと思われるので、正した上で要約した。

(7) 『中国文学論集』第四二号、二〇一三年。

(8) 銭氏は『樵香雜記』とするが、畿輔叢書本・四庫全書本等は『樵香小記』とするので、それに従って改めた。なお、ここでは四庫全書本をテキストとしたが、畿輔叢書本はこの

条を「總集自註賦詩」と題し、文意に影響のない程度の文字の異同がいくつある。

- (9) この錢大昕の語の出典は不明。注6前掲許氏論文が指摘するように、『十駕齋養新錄』卷一六「庾闡揚都賦」では、張守節『史記正義』に庾仲初（闡の字）の「揚州賦注」を引いて「三江」の語を説明しているのので、「揚都賦」に自注があり、謝靈運の魁になったとするのみ。ただし、許氏は『史記正義』に庾仲初「揚州賦注」は見えず、『水經注』沔水の条には引かれるが、一方濡水の条では庾杲之「揚都賦注」として引かれているので、自注かどうか断言できないとする。

また、注7前掲東氏論文が指摘するように、『廿二史考異』卷二四「謝靈運傳」においては、賦の自注の例は以前の史書に見えず、後の例も張淵の「觀象賦」と顔之推の「觀我生賦」のみで十七史の中に三例しかないことを述べるのみである。なお、後述するように、「季漢輔臣贊」の注は陳壽の付したものであり、自注ではない。

- (10) 「觀象賦」は、神麿二年（四二九）の記事の後に引かれており、謝靈運が景平元年（元嘉二年（四二三）四二五）の第一次始寧退居時期に作ったとされる「山居賦」よりやや後の作ということになる。

- (11) 胡刻本には「辭」の文字がないが、四部叢刊本によって補った。

- (12) 江蘇古籍出版社、一九九二年。

- (13) 注9参照。

- (14) 以下の『史通』の解釈に際しては、西脇常記『史通内篇』

（東海大学出版会、一九八九年）、趙呂甫『史通新校注』（重慶出版社、一九九〇年）を参照した。

- (15) 『淮海亂離志』の作者については、蕭大園とする説の他にも諸説がある。ここでは劉知幾の記述に従った。注14前掲書に詳しい。

- (16) 今鷹真・井波律子・小南一郎『三國志Ⅱ』（筑摩書房、中国古典文学全集、一九八二年）および注14前掲書参照。

- (17) 注4前掲書。

- (18) 岳麓書社、集部經書典叢刊、一九九九年。

- (19) 中華書局点校本『宋書』は、この部分を「薄洲有山、謂之島嶼、即洲也（薄洲に山有る、之を島嶼と謂ふ、即ち洲なり）」と句読を切るが、状況はこちらでも同様である。

- (20) 「鵝」字の音は一般には「ゲキ」であるが、靈運の音注に従って「イツ」と読んでおいた。

- (21) テキストは「已消反」とするが、「鵝」に「エウ」の音はないようであり、「已」字の誤りと思われるので改めた。

- (22) 「山居賦」の数字については許氏により（注1参照）、「觀象賦」・「觀我生賦」は中華書局本正史に基づいて数えた。残りは『文選』（便宜上四庫全書本を用いた）から李善注のみを削除して数えた。本文中に随時挿入されている誰のものが不明の音注も念のため含めておいた。「東京賦」薛綜注と「吳都賦」劉逵注の文字数が全く同じなのは記入ミスではなく偶然である。「対正文比」は正文を一とした時の注の比率を計算したものである。なお、「幽通賦」の曹大家注と「子虛賦」「上林賦」の郭璞注は、他の注者の注が多く紛れていて注釈

の量の傾向を知るには不適切と思われるので、対象から除外した。

〔附記〕「山居賦」の自注というテーマについて初めて考えたのは、森野繁夫先生が広島大学文学部に戻られ、大学院の演習の授業で「山居賦」を扱われた時であった。当時助手であった筆者は、演習に参加することを許され、この作品に出会った。ある夜、中文研究室のコンパの帰りに森野先生とご一緒した際に、ふと思いついて「謝靈運は山居賦になぜ自注を付けたのでしょうか」とご質問してみた。先生は反対に筆者になぜだと思うかと質問された。その時に何とお答えしたのかもよく覚えていないが、筆者のまとまりのない答えを先生が優しく微笑みながら聞いてくださったことと、ちやうど歩いていた御幸橋の街灯が京橋川の水面に美しく映えていたことだけは鮮明に覚えている。今となつては屋下に屋を架するような駄文を書いたのは、この思い出のためである。できの悪いものではあるが、ずつと気になつていた宿題をやつとこのたび終えることができた。